

Flamenco

ロルカの世界を軸に発展した 日本のフラメンコ



求道の旅人
小島章司とフラメンコの世界
大久保元春(著)
¥ 2,310
出版社:角川SSコミュニケーションズ
ISBN: 9784047318069

大久保 元春

おおくぼ もとはる

日本フラメンコ協会常任理事、スペイン現代史学会会員。主要著書・論文に「スペインの経済発展と企業経営(1)(2)」「スペイン現代史」、「スペインの経営環境の変化と企業経営の影響」(スペイン現代史)、『フラメンコの風を抱かれて』(菁柿堂)、『求道の旅人 小島章司とフラメンコの世界』(角川SSコミュニケーションズ)。



Motoharu Okubo

吟遊詩人で音楽家、戯曲家、演出家、画家でもあったフェデリコ・ガルシア・ロルカは1920年代から1936年、38歳の若さで非業の最期を遂げるまで多彩な才能を駆使して活躍、日本にも多くのロルカ信者をつくり、日本のフラメンコ界の発展にも大きな影響を与えた。

ロルカ自身も、幼少時よりフラメンコの愛好家であり、ギタリストやカンタオールを自宅に招いてフェルガを催す父から影響を受け、ピアノに習熟しながら次第に土着のフラメンコに魅せられ、ジプシーからギターの手ほどきを受けるなど、フラメンコの世界にのめり込んで行った。そしてフラメンコの本質を追求して「ドゥエンデ」に行き着き、カンテ・ホンドの歴史的、芸術的重要性を語るまでに至る。

特に日本では、フラメンコとの関連は深く、『ジプシー歌集』(28)、『カンテ・ホンドの詩』(31)、『イグナシオ・サンチェス・メヒアスへの哀悼歌』(35)などの詩集、『マリアナ・ピネーダ』(27)、『イェルマ』(34)、『ベルナルダ・アルバの家』(36)などの戯曲、それにアンダルシア民謡の採譜・編曲した「ソロンゴ」「カフェ・デ・チニータス」などのスペイン古謡など、ロルカ作品がよく取り上げられ、フラメンコ作品のモチーフや題材となり、多くのアーティストにとってフラメンコの原点ともなっている。

実際、ロルカの詩や戯曲などの作品をフラメンコのモチーフとして取り上げるようになったのは、ロルカの詩のもつ叙情性や音楽性だけでなく、晩年近くに発表した「ドゥエンデの理論とからくり」など、魂の叫びを醸し出す根源的な死と生を孕んだ内容に魅せられた面も大きい。特にスペインに留学したり、アンダルシアの土壌に根づくフラメンコを目の当たりにした者は、その向こうに広がるロルカの世界をフラメンコで表現したいと誰しも一度は思うはずである。

その動きは、60年代から70年代にかけて渡西した者、あるいはロルカの死後、発刊された「ロルカ全集」や映像・音楽などの影響を受けた者が日本でロルカを紹介、伝播したお蔭で、それ以後ロルカを部分的に取り入れたり、公演の演目に加えるなど、次第にロルカが

日本でも知られるようになり、プーロ・フラメンコの基本形にもなっている。

その流れは、日本のフラメンコの開花期である70年代、80年代に顕著で、踊りだけでなく、歌、ギターや朗読の分野にまで及んでいる。

例えば、長嶺ヤス子は七四年頃「イグナシオ・サンチェス・メヒアス」を踊り、芸術祭優秀賞と第7回舞踏批評家協会賞を受賞、一躍注目を集めた。七六年には帰国後間もない蒲谷照雄がギターコンサートを開き、天本英世がレンタルドールとしてG・ロルカの詩作品を朗読し、島みち子、小笠原その子が踊って、その見事なアンサンブルで好評を博した。

80年代に入り、83年7月、ギターの北村隆がこまばエミナスでG・ロルカ スペイン民謡集より「ホイソ伯爵のロマンセ」「セビーリヤの子守歌」「ソロンゴ」を演奏、10月には天本英世が「天本英世のロルカ」朗読の会でフラメンコギターの調べをバックにロルカの世界を唄い、11月、東伸一矩が第2回リサイタルを神戸、京都で開催、そこで「ロルカを踊る」を披露、12月には北海道の小角典子がトマス・デ・マドリを招いて、舞踏団5周年記念公演に「ベルナルダ・アルバの家」をテーマに開催、札幌市芸術祭奨励賞を受賞するなど、フラメンコの開花期はロルカの世界を繰り広げることで着実な発展の礎をつくった。

84年には、マヌエル・カーノの愛弟子の吉川二郎がロルカのスペイン民謡集を編曲して「四人のF・G・ロルカ」を発表、リサイタルを85年にかけて開いたり、テレサ林が「フラメンコの世界“ガルシア・ロルカを踊る”」と言うテーマで闘牛士イグナシオ・サンチェス・メヒアスに捧げる公演を行っている。

この頃、最も活躍していたのは、スペイン全土を旅して「スペイン巡礼」や「スペイン回想」を著した俳優の天本英世である。ロルカの時代のフラメンコは、パイレ、カンテ、トーケと共に朗詠(レシタシオン)は付き物であったが、日本では小海永二や小川英晴など一部の詩人を除いてあまり流行らなかったようだ。唯一、天本英世が日本語、スペイン語で吟誦、86年に銀座「ラ・ポラ」でロルカの詩と歌を朗読し、唄ったり、六甲スペイン祭ではフラメンコ・ギターの藤塚栄二と共演するなど、ロルカの思いを誠実に伝えた功績は大きい。

その後、ロルカを大編成で踊って注目されたのは東伸一矩で、87年大阪厚生年金ホールで上演した「イグナシオ・サンチェス・メヒアスへの哀歌」は、カンテにエンリケ・エレディア、瀧本正信、ギターに藤井正仁、藤塚栄二、木越剛、上林功など関西の一流アーティスト、それに天本英世の朗誦が入った布陣で、プロローグから「負傷と死」「不在の魂」「存在する肉体」「流れた血」、そしてエピローグと丁寧にロルカの死を痛み、哀悼を捧げて高い評価を受けた。

その後、80年代後半から90年代の後半にかけてギターの土橋幸男、竹下茂、伊藤日出夫、エンリケ坂井、踊りの小角典子、沙羅一栄、佐藤佑子、小松原



天本英世と北御門義幸(天本英世記念館をつくる会事務局長)
写真提供: 北御門義幸

庸子、小島章司など、大物アーティストがロルカをモチーフに度々公演を行っている。

特に1998年は、ロルカ生誕百年に当たり、日本でもいろいろな記念行事が催されたが、なかでも小島章司は、「ロルカ詩組曲“夜”を取り入れた「フラメンコに魅せられて1998〜TOKIO」に続いて「詩人は死んで伝説は生まれた」、そして「ガルシア・ロルカへのオマージュ」と立て続けに公演を行い、ロルカを偲ぶなど、むしろロルカは死して再生した感があった。

小島章司は、その後「LUNA」(99)、「1929」(00)、「黒い音」(01)、「ロマンセ」(05)など、踊りの原点をロルカの世界に求め、ひたすらロルカを通してフラメンコの

新しい世界を創造して来た。その思いは留まる事知らず2006年、ロルカ没後70周年記念に「FEDERICO」を公演、更にロルカと共に内戦の犠牲者となった詩人たちを悼んで「戦下の詩人たちく愛と死のはざままで」を上演、愛と平和をロルカに託して実現しようと願う舞踏家のひたむきな思いが伝わってくる。

かようにロルカがこの世に発したフラメンコの原点ードウエンデは現在のフラメンコに生き続けてはいるが、未来を担う若きフラメンコ・アーティストにどれだけ継承されていくかは最近の傾向を視ている限り、必ずしも楽観はできない。ただロルカの精神を灯した光を放ち続けて欲しいと願うばかりである。

大久保 元春
(文中敬称略)

“Las sevillanas para un sevillano”

Desde nuestra más tierna infancia, de generación en generación, nuestros padres, de una forma natural, siempre han cantado, bailado y tocado sevillanas en las veladas de los barrios, Cruces de Mayo y por supuesto en la madre de todos los eventos en Sevilla, “La Feria de Abril”, el evento más importante y más esperado año tras año por todo aquel que se considere sevillano.

Pero, aunque no lo crean, con las sevillanas no solamente se expresa alegría, sino también pena y tristeza, chistes y “cachondeo”. Por ejemplo, cuando algún amigo tiene que marchar por un periodo largo de tiempo o para siempre, los amigos suelen cantarle “sevillanas lentas o tristes” con letras que suelen describir situaciones similares a las que se están viviendo. Esto suele ser una costumbre de los nacidos en Sevilla.

Son motivos de enorgullecimiento personal, pues cuando hay alguna fiesta, los héroes del momento, son aquellos que saben cantar y tocar sevillanas, no digo bailar porque en Sevilla todos los sevillanos y sevillanas saben - aunque a su manera - bailarlas.

Es interesante e ilustrativo destacar, que cuando llega la víspera de la Feria de Abril, en casi todas las academias de baile flamenco, sólo se enseñan sevillanas para bailarlas en la feria (cosa que no ocurre a lo largo del año).

En nuestros días, las sevillanas ya se bailan, cantan y tocan no solamente en Sevilla, sino en toda España y parte del extranjero, hay incluso discotecas, en grandes ciudades, donde solamente se bailan sevillanas.

Aún así, siempre quedan amigos míos, que creen que sin ser sevillano sólo se pueden bailar “sevillanas de academia” puesto que

las verdaderas, sólo las bailan los nacidos en Sevilla.

Para mí, que soy sevillano y guitarrista flamenco profesional, son las señas de identidad de la ciudad en donde nací, por eso es un motivo de orgullo y satisfacción poder enseñar a personas - que nada tienen que ver con la cultura andaluza y en concreto con la de Sevilla - que tengan tanta admiración y cariño por ésta, ya que en definitiva es la cultura de todos los que somos de Sevilla.

Miguelón

日本でもスペインでもフラメンコ(踊り、歌、ギターすべてにおいて)を習う時に、一番初めに習うセビジャーナス。正確に言えば、「フラメンコ」ではない。スペイン・セビージャのフォークダンスである。

これは、セビージャでは地域のお祭りでいつでも踊ったり歌ったりするし、何といても最大のお祭は「フェリア・デアプリル(春祭り)」である。

しかし楽しい時ばかりの曲でもない。

つらい時、悲しい時、風刺をする時、いろいろな場面でも歌われる。たとえば、友人との悲しい別れの時、その状況に合った歌を相手に歌ったりもする。セビージャの生活に根付いたものなのである。

また、セビジャーナスの歌を歌えること、ギターで弾けることは仲間内で一目置かれる。この場合踊りは含まれない。なぜなら、たとえそれが自己流であっても、セビージャの人はみんな踊れるから。

踊りに関しては、より上手に踊れるようになるため(お祭りの人気者になるため)「フェリア・デアプリル」が始まる直前の短期間、セビージャのほとんどのフラメンコ教室がセビジャーナスクラスでいっぱいになる。

そのようなセビージャの人たちの生活に密着したセビジャーナスが、現在では、スペインの他の地域や外国で、踊り、歌い、演奏されることは私たちセビージャの人間にとって、とても嬉しいことである。

ミゲロン

フラメンコスタジオミゲロン Flamenco Studio MIGUELON

現役で活躍中のプロが講師をする
フラメンコ教室



- 入会金 5,250 円
- ダンス(バイレ)クラス(グループ)
60分×4回 10,500円
- ギター・歌・パルマクラス(個人)
40分×3回 10,500円
…詳しくはお問い合わせ下さい。

石橋スタジオ

(主にダンスクラス)

池田市井口堂 1-9-3

センチュリーショウエイ VII1 F

梅田スタジオ

(ギター・歌・パルマクラス)

大阪市北区太融寺町 8-10

梅田高速ビル 604

E-mail

miguelon@nifty.com

WEB

<http://www.miguelon.jp/>
TEL 072-760-4858

フラメンコスタジオミゲロン

Flamenco Studio MIGUELON

Miguelón

フラメンコスタジオMIGUELON(ミゲロン)主事

スペイン・セビージャ出身。

9歳の頃よりフラメンコギターを学び、14歳のときプロデビュー。

その後スペインを中心に世界各国でコンサート、イベントショー、タブラオなどに出演。

1999年に日本に移り住み、関西を拠点として日本全国で活躍中。

現在ではギタリストに加え、審査員、イベント企画、ラジオ出演など活動は多方面に亘る。